

2005年のスギ・ヒノキ科花粉の飛散状況

○堀口貴司（日本気象協会）、佐橋紀男（東邦大学薬学部）

【はじめに】

現在、スギやヒノキが原因となる花粉症の患者は全国的に多い。このため、これら花粉の飛散観測やそれに基づく花粉予測は、花粉症患者にとっても重要な情報である。

花粉の飛散量は気象と密接な関係があることが知られているが、2004年夏は記録的な猛暑となり、2005年春のスギおよびヒノキ科花粉は、記録的な大量飛散となることが予測された。ここでは、日本気象協会が観測を行っている東京・大手町のデータを用いて2005年のスギ・ヒノキ科花粉の飛散状況の概要を報告する。

【方法】

観測方法は、東京都千代田区大手町にある気象庁・東京管区気象台屋上にてダーラム型の花粉キャッチャー(暁電機製作所製)を設置し、花粉情報標準化委員会の合意事項にもとづいて行った。

【結果】

- ・ 飛散開始は2月22日で、例年(2月16日)より6日ほど遅かった。
- ・ スギ、ヒノキの花粉数はそれぞれ13305.1、6604.3であり、いずれも1995年の観測開始以来最多、10年平均の8倍強となった。
- ・ 100個/日以上飛散した日が多く、1日における最多飛散数も過去の記録を更新した。
- ・ ヒノキ花粉の全体に対する割合が33%といつもの年(18%前後)より多く、また、ピークが短い期間に現れたため、ヒノキの1日における最多飛散数(1562.7個)がスギの値(1236.4個)を超えた。
- ・ 飛散期間が長かった。スギは5月のはじめにはほぼ終息したが、ヒノキに関しては大型連休明けの5月10日までに飛散終了を確認できなかった。

【考察】

ここまで大量飛散となった理由として

- ①2004年夏の猛暑の影響を受けた
- ②2004年春の飛散が記録的に少なかったためその反動があった
- ③過去の飛散と比べスギも多かったが、それ以上にヒノキの飛散が増えた、ということが考えられる。また、花粉飛散時の気象や花粉キャッチャーの設置場所によっても花粉数が増減することも考えられる。

なお、2004年末時点での2005年予測は、多くても10年平均の2.7倍としていた。これを大きく上回る飛散となったが、さらにデータの検証を行い、今後の予測精度を上げていく必要がある。

